

東京通信大学紀要 第2号 (2019) 正誤表

Journal of Tokyo Online University, No.2, 2019 Errata

今橋 みづほ・井上 健朗・小倉 常明・矢野 明宏

ソーシャルワーク教育における遠隔教育の手法に関する一研究

頁 Page	行 Line	誤 Error	正 Correct
P. 146	表 (2), 13	開原 <u>成</u>	開原 <u>成允</u>
P. 154	下から 5 行目	開原 <u>成</u>	開原 <u>成允</u>

〈学内共同研究報告（研究ノート）〉

ソーシャルワーク教育における 遠隔教育の手法に関する一研究

今橋 みづほ・井上 健朗・小倉 常明・矢野 明宏

Abstract 社会福祉専門教育において通信制での大学教育は古くから行われてきた。しかし、援助専門職養成としては、対面授業の機会の少なさ等の制限が指摘されている。筆者らはソーシャルワーク専門職の養成を行うにあたっての効果的な教育手法に関心を持ち、文献研究、先駆的な実践機関へのフィールドワーク、学生への聞き取り調査によって調査研究を行った。文献研究からは双方向性のある学習方法や学びの共同体、コミュニティの存在が高次の学習に有効であること、フィールドワークではインターネット会議システムを用いた学生によるプレゼンテーションという同期性の高いカリキュラムが成果を挙げていることが理解された。学生への聞き取り調査では、学生は、対人援助スキルの獲得を目指し、他の学生と協働での学びを求めている一方、同期性の高いカリキュラムの過度な実施は、時間的な制約から通信教育での学びのメリットが失われるとも感じていることが示唆された。

キーワード：遠隔教育、ソーシャルワーク、教育手法

1. はじめに

近年、我が国の福祉人材育成においては、社会人の社会福祉分野へのキャリアアチェンジや都市部への教育機関の偏在解消の観点から、時間や地理的条件に縛られない学習機会の提供が求められ、Eラーニングなどを用いた遠隔教育への期待が寄せられている。（2016：ソーシャルワーク教育団体連絡協議会「新福祉ビジョン特別委員会」）

東京通信大学（以下、本学）は、人間福祉学部を設置し、ソーシャルワーカーの国家資格である社会福祉士と精神保健福祉士の養成を行っている。

本学は、インターネット回線を利用して、収録した授業の音声付き動画を学生に配信している。本学学生は、指定された期間内に授業を視聴し、各授業回の達成度テスト、単位認定試験を受け科目単位を修得する。

本研究グループの教員は、これまで主に通学制の大学での社会福祉士及び精神保健福祉士の養成校にて授業を担当してきた経験を持つが、通学制の大学での授業方法をそのまま通信制の大学の授業に用いることの困難性を感じてきた。そのなかで、通信制大学におけるソーシャルワーカーの養成に関する教育

手法について、試行錯誤を行っている状況である。

本研究では、ソーシャルワーク教育における遠隔教育の手法について考え、今後の本学の教育に活かし、また通信制、特に E-ラーニングを用いての福祉教育手法の発展に寄与することを目的として報告を行う。

2. 研究の目的

我が国における社会福祉の大学教育において通信教育は半世紀を超える歴史を持つが、「専門職の養成」を通信課程において行うことについては、様々な意見が見られる。(2016: 中村)

本研究グループの教員の一人が社会福祉関係学会にて、通信教育による大学カリキュラムについて報告をした際に、参加者から「通信教育でソーシャルワーカーの養成はできない」という言葉を投げかけられたことがあった。これはとりもなおさず、対人援助職であるソーシャルワーカーの養成を「対面教育」の場面が極めて少ないなかでどのように実施できるかという投げかけであったと考える。

1987年に社会福祉士及び介護福祉士法が成立し、社会福祉士の国家資格が設けられてから30年以上が経過し、社会福祉系大学では、国家資格の取得及びその後の実践力向上に向けた様々な努力がなされてきた。通信制の大学においても例外ではない。国家資格の成立以前から、社会福祉の大学教育において、通信教育は取り入れられ、人材の輩出をしてきたが、専門職養成においては賛否両論、様々な意見があげられている。

対人援助を軸とするソーシャルワーカー(社会福祉士・精神保健福祉士)の養成を遠隔教育の手法を用いて実施する教育機関は、様々な創意工夫のなかで実施しているが、対面での教育場面が少ない中で、どのような方法が実施可能であり、かつ、効果的であるかについての研究報告はまだ少ない。

本研究では、教育を提供する側、受ける側に様々な物理的な制約がある遠隔教育において、ICTの活用を視野に入れながら、効果的かつ実施可能な教育手法についての仮説生成を目指したい。

なお本研究における「遠隔教育」の定義は、アメリカ教育省が定義した「指導者から隔離された学生・生徒・児童を少なくとも1つのテクノロジー(インターネット、放送、電話会議、DVD等)を利用して同期・非同期の支援をして教授することである。」(2017: 大野・須曾野論文の訳出より)の定義を採用することとした。

3. 研究の方法

本研究は、ソーシャルワーク遠隔教育に携わる大学教員4名を中心に行うこととした。

研究の内容は、①先行研究及び文献調査、②先駆的実践を行う教育機関へのフィールドワーク、③福祉士資格取得を目指す本学学生に対するインタビュー調査を3つの柱として実施した。①の文献研究では、遠隔教育の手法と類型を導き出すための文献抄読、②のフィールドワークでは、Eラーニングを活用して大学院教育を実施している教育機関への見学及び教員への聞き取り調査、③のインタビュー調査では、東京通信大学人間福祉学部の学生への調査としてのフォーカスグループインタビュー（以下、FGI）を実施した。

FGIで得られたインタビュー内容については、音声テキスト化し、質的データ分析ソフト（MAXQDA）を活用し、文節ごとにデータ化し、意味別にカテゴリー分類し、概念名を付与してインタビュー内容の再構成を行った。

4. 倫理的な配慮

本研究においては、学生へのFGIを実施することから、調査対象となる学生に対して、①研究の意義・目的、②研究の内容・方法、③研究協力期間回数・日数・場所、④研究対象者として選定された理由、⑤研究協力により生ずる負担、⑥研究協力の任意性と撤回の自由、⑦研究に関する情報公開の方法、⑧個人情報取り扱い、⑨研究に関する相談・問い合わせといった項目に関し、調査前に説明の上、同意書に署名・捺印を依頼した。特に、匿名と研究協力の撤回については、十分な確認を取ることに努めた。2018年度東京通信大学人を対象とする研究倫理委員会の書面及び研究代表者の立ち合いのもとでの審査を受けた上で調査研究を実施した（倫理審査承認番号：東通倫研・201801）。

5. 調査結果

5.1 先行研究

文献調査として、「遠隔教育総論」、「遠隔教育の実践評価と教育手法」、「ソーシャルワーク教育」の3つのカテゴリーに分けて精査した（表1 遠隔教育先行研究リスト参照）。このうち、本研究を進めるにあたって多くの示唆を得られた文献を紹介する。

Eric Bray（2006）らは、日本のある主要都市の通信制大学に登録している学生にオンライン通信教育の満足度に関する質的及び量的質問紙調査を実施し、学生の満足度とそれに何が影響しているのかを調査した。その結果、満足度に影響を与える要因として、①他の学生とのインタラクション（相互交流）と②教員とのインタラクションの困難さを指摘している。通信教育においては、「他の学生や教員との交流の機会をいかに多く与えられるかが課題であること」を示唆している。また、この調査対象の大学では、同期メディアによる授業やメールでの対応、チャットエリアの設定などのシステムが稼働しているものの、学生のニーズには充分対応しきれていないことが指摘されている。

これらのことから、オンライン通信教育の学生の満足度を高め、ニーズを満たすことの相互交流の面での困難さが把握できた。

大野ら(2017)は、今後日本の高等教育機関でも遠隔教育がより一般的となり、カリキュラムデザインの基盤の見直しが必要となると示し、オンライン学習を分析するための概念的枠組みとして、Garrison(2000)らによる「探求型コミュニティ」にふれている。探求型コミュニティは、学習を進めていく際に有効な学習共同体、特に高次の学習には、この学習共同体の成立が不可欠であるとされる。これを前提にして、①認知的存在感、②社会的存在感、③教育的存在感の3つの重なり合った構成分子から成り立つ。この探求型コミュニティによって、問題に対する知識を深めたり、学習者が個人的な感情、意見、価値観などを共有したり、個人的に意義があり、かつ教育的に価値のある学習成果が可能になると指摘している。加えて、フロリダ大学の教育活動の評価結果に基づいての可能性や提言が述べられている。遠隔教育でのソーシャルワーク教育を行う際にこの「探求型コミュニティ」を構築し活用していくことが有効な方法となるのではないかという示唆を得た。

表1 遠隔教育先行研究リスト

令和元年7月15日現在

(1) 遠隔教育総論

NO	題名	著者	出典	発行年
1	遠隔教育の推進に向けた施策方針	文部科学省 遠隔教育の推進に向けた施策方針	文部科学省	2018
2	遠隔教育 生涯学習社会への挑戦	マイケル G. ムーア/グレッグ・カースリー共著 高橋悟編訳	海文堂	2004
3	二つの遠隔教育—通信教育から遠隔教育への概念的連続性と不連続性について—	鈴木克夫	メディア教育研究第3号 1-12	1999
4	eラーニング 遠隔教育メディアの変遷と今後の課題	滝田辰夫	メディア・コミュニケーション	2002

5	多様なメディアを利用した同期型遠隔講義環境の構築・実践	長谷川忍、但馬陽一、ニッ寺 政友、安藤敏也	メディア教育研究 第2巻 第2号 79-91	2006
6	遠隔教育研究における「遠隔教育」論再考-学習者をめぐる関係性に注目して-	古壕典洋	東京大学大学院教育学研究科紀要第49巻	2009
7	M.G.ムーアの遠隔教育論-トランザクショナル・ディスタンス論の精緻化にむけて	熊谷慎之輔	岡山大学大学院教育学研究科研究集録第140号 133-141	2009
8	カナダ・アメリカのオンラインコースの概念的枠組み「探求型コミュニティ」：日本の高等教育機関での応用の可能性	大野恵理、須曾野仁志	三重大学教育学部研究紀要第68巻教育科学 237-243	2017
9	文部科学省先導的大学改革推進委託事業「ICT活用教育の推進に関する調査研究」委託業務成果報告書	加藤浩、Deborah、Bushway、John Byrne 他	放送大学学園	2011.3
10	実践的講座構築ガイド～産学連携教育の自立的展開を進めるために～	独立行政法人情報処理推進機構 IT人材育成本部 イノベーション人材センター	独立行政法人情報処理推進機構	2013.10 改定

(2) 遠隔教育実践評価

11	オンライン通信教育学習者の満足度	Eric Bray、青木久美子	メディア教育研究 第16巻 第2号 17-31	2006
12	金沢星稜大学遠隔授業システムの有効活用による実践的な研究—教授・学習行動の改善による	岡部昌樹	金沢星稜大学人間科学研究 第3巻 第1号	2009
13	遠隔授業システムとインターネットによるeラーニングとの融合—理想の社会人教育システムをめざして—	開原成、篠原信夫	国際医療福祉大学学会誌 第17巻 2号	2012

(3) 遠隔教育手法

14	生涯学習支援のための大学eラーニング	山本恒夫	メディア教育研究 第6巻 第1号	2009
15	放送大学における遠隔研究指導	秋光淳生	メディア教育研究 第7巻 第1号	2010
16	クラウド型オーサリングツールを活用した非同期型の演習授業実践	安間文彦	eラーニング研究 第6号 45-49	2017
17	大学通信教育の教育効果を高めるためのストラテジー	小池源吾、藤井伊津子	吉備国際大学研究紀要(人文・社会科学系)増刊号、31-40	2017
18	高等教育における遠隔教育の概要とその実践・歴史的視点と事例研究を題材として—	片岡昇、久保田賢一	関西大学総合情報学部紀要「情報研究」第15号	2001

(4) ソーシャルワーク教育

19	既存ソーシャルワーカーの現状の課題に関する考察-「新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン」に込えうるために	中村卓治	広島文教女子大学 紀要 51 13-23	2016
20	「ソーシャルワーカー養成教育の改革・改善の課題と論点」最終報告	ソーシャルワーク教育団体連絡協議会「新福祉ビジョン特別委員会」	ソーシャルワーク教育団体	2016
21	Eラーニングによる社会福祉教育の実践	家富誠敏、根津敦、服部万里子	城西国際大学紀要 13(3)、65-80	2005
22	社会福祉士・精神保健福祉士養成カリキュラムにおけるアクティブ・ラーニングの試み	江間由紀夫	東京成徳大学研究紀要-人文学部 応用心理学部-第 25号 73-81	2018

5.2 先駆的実践を行う教育機関へのフィールドワーク

遠隔教育の先駆的実践を行うA大学大学院のB氏に聞き取り調査を実施した。その内容は以下の通りである。

- (1) 日時：2018年9月13：30～14：30
- (2) 場所：A大学大学院教室
- (3) 聞き取り調査対象者：A大学大学院教授 B氏
- (4) 聞き取り内容

1) 大学院授業の概要

A大学大学院では、通学制と通信生の学生が、同一科目を履修しており、同期性をもってライブ授業を展開している。担当科目は「ソーシャルワークリサーチ演習（スクーリング）」（必修）で、大学院のメディア授業として認可を受けているものである。授業では、体験的な内容に力点をおいており、一般的な通信制の教育手法であるテキスト送付、レポート返信ではできないと考え、「Zoom（録画可能なインターネット動画会議システム）」を活用した授業を展開している。

2) 授業でのポイント

レポートの発表者（学生）と聞き手（学生と教員）が同時、双方向的に対話するために、カメラ、スピーカーを使用し、ディスカッションができる環境にしている。その場でデータを送ることも可能である。学生が対面で発表し、それに対してディスカッションができることに重点がおかれ、受動的に聞いているだけでは教育効果は得られないと考え、整えられた環境であった。

同期的な授業のメリットは、臨場感、同じ時間の確保、人の発表を聞くという相互作用が生まれることである。通信制の学生も通学してきて授業を受ける事も可能である。教員とのやり取り、学生同士の交流がその目的であった。

3) 本方法導入以前の学生の状況

過去に通信制では、遠隔地域から数名の在籍者がいたが、本講座は、中間発表会に来校することを条件としていたため、時間をかけても大学まで通学しての受講が強いられていた。学生の発表の教育的意義を達成するためには、スクーリングへの参加が必須と考えられていた。この問題を解消すべく本手法が取り入れられた。担当教員は、「一方向性のメディア授業とは異なり、情報交換の質が向上し、内容を深めて発展させることができた」と説明している。

4) 大学での授業

調査校では、学生自身に問題意識を持ってもらうことを目的としたフィールドワークを用いた2年間の「課題発見型の授業」に取り組んでいる。これは、「体験する」だけでは言語化できていないものを、言語化するように促す試みである。具体的には、学生に体験の中から、「地域課題」を見つけさせるものである。授業では、学生に体験を報告させ、それをコーチング（学生主体型の指導）していく。ただ単に学生の行うフィールドワークを管理するための授業というわけではなく、活動を展開していくときに課題が生じた場合、基本的にはその解決までを学生に任せるようにし、教員はそれをサポートする。問題は起こるはずであり、事前に、注意事項、団体のルール、学生自身を守る体制をとる。未然に防ぐというようなことはあえてしない。怒られた体験が、学生の学びを深めることに繋がることを価値の一つとしている。

5) 教員と学生の関係の構築

調査校の教員は、「一方向性のメディア型授業」で、学生の顔が見えないことは不利と考えていた。履修学生数は25人程度だが、何か問題があれば、学生と対面で相談しながら進めていくようにされていた。信頼関係が100%になることはあり得ないが、学生の状況を可能な限り把握するには努めていくと強調されている。学生の主体性、自主性を発揮できるように、アクティブ・

ラーニングを重視し、フィールドワークについては、狭義の福祉にとらわれず、学生の関心に合わせて様々な出来事のなかから選ぶこととされていた。

6) 通信制教育のポイント

通信制での授業では、印刷教材のみでの授業は行わないように心掛けられていた。「通信制でソーシャルワーカーの養成は可能なのか」という質問に対して、調査校の教員からは「賛成とはいえない。しかし、一方向性のメディア授業だけではなく、スクーリングも遠隔教育の一手法であると考えれば、その内容充実によっては可能性をみる。また、それ以外にもテクノロジーの進化や活用によって学びの多様化は出てくるであろう。通信制で面接授業に匹敵する学びが担保できれば良いとも思う。現状の通信教育はコミュニケーションの方法に限られるのではないかと考える。」との回答であった。また「短期の養成施設などで、ソーシャルワークの技術、価値、倫理が身につくのかという疑問がある。技術面を審査する国家試験は存在していないが、それをどう教育していくかが課題である。」と付け加えられた。

7) ソーシャルワーク教育の在り方

調査校では、教員や学生同士での学びあいのなかから、技量は身につくとの教育哲学が強調されていた。Skype や Zoom 等のオンライン・コミュニケーションツールでできることと、オフラインの対面でしかできないことがある。直接のやり取りは、対面とメディアでは差があるが、これしかないという考え方は、教育方法を狭めることになるので、「通信制でソーシャルワーク教育は「ダメ」ではないが、現状のままでは賛成はしない。」と語られた。

調査校では、学生に課題を与えて、学生が能動的にテーマに臨むように促されていた。時間を決めて同じ時間に各自 PC の前に集合して、発表しあえれば、Skype で同時ディスカッションも可能であろう。学びあいのデザイン、能動的な学習、テクノロジーの活用、アクティブ・ラーニング等を活用する学びの在り方が必要であろう。ソーシャルワークは科学であり、経験論のみに基づく援助は本当の技術とはいえない。そのため、ソーシャルワークの学び手はスーパービジョンを受けながら、問題に向かいあうことが重要とされてきた。

B氏は、「ソーシャルワークにおける通信教育は否定しないが、対面授業が少ないなかでの現状のソーシャルワーク教育の通信教育に関しては賛同できない」と意見を述べていた。この大学院の講義で導入された同期性の高いインターネット会議システムを活用した授業の高い成果は、ソーシャルワークの遠隔教育のあり方への一つの優れた提案と考える。

5.3 福祉士資格取得を目指す本学学生に対するインタビュー調査

通信教育にて、社会福祉士及び精神保健福祉士の資格取得を目指す学生に対して、「目指すソーシャルワーカー像」および「効果的な学習方法」についてインタビュー調査を実施した。

(1) 日時：2019年2月 16:00～18:00 (2時間)

(2) 調査対象者：社会福祉士・精神保健福祉士資格取得を目指す本学2年生6名

男性2名、女性4名、計6名 20代～70代

(3) 調査の分析方法等

GFIの内容をICレコーダーにて収録、それをテキスト化した上で、文節に区切ったデータをコード化し(N=156)、MAXQDA 2018 Analytics Proを使用して分類した。それを、4名の共同研究者で、コード分類したものを意味別にカテゴリーに分け、概念名を付し、インタビューの再構成を試みた。

(4) 分析結果

1) 目指すソーシャルワーカー像

目指すソーシャルワーカー像(N=46)についての語りの分析からは、①【連携活動ができる】ソーシャルワーカー、②【援助者としての姿勢】を持っているソーシャルワーカー③【利用者との関係形成】ができるソーシャルワーカーなどの目指すべきソーシャルワーカー像のカテゴリー分類が抽出された。

表2 『めざすべきソーシャルワーカー像の語り』 (N=46)

カテゴリーの概念名	生のデータの例
【連携活動ができる】	<ul style="list-style-type: none"> ・「いろんな仕事の方たちとの橋渡しが一番重要な仕事」 ・「他者と福祉間との連携を考えられるような人材に（ならなければならない）」
【援助者としての姿勢】	<ul style="list-style-type: none"> ・「寄り添ってしっかり助言してくれる人とか、そういう人になれるような支援ができる人材になりたい」 ・「関わったら投げ出したくない」 ・「困難な事例や状況に直面したときに、相談業務を全うできる人材になりたい」
【利用者との関係形成】	<ul style="list-style-type: none"> ・「気持ちでは寄り添えるとは思っていても、相手がどこまで寄り添ってほしいかっていう距離感というのを学んでいかないといけない」 ・「（利用者との）距離感の問題（を理解してかわる）」

学生による目指すべきソーシャルワーカー像の語りは、そうなるためには何を学ぶべきかということに繋がると考えられる。学生の声としては、【連携】【姿勢】【関係形成】といったことが挙げられていた。これらのことを可能にする能力や技術の修得は、一方向的な知識伝達型の学習方法だけでは身につけにくいものであることは予測される。このことは、通学生の学生にも同様にあてはまる。応用力や問題解決能力を身につけるあるいは、価値などを学ぶための演習系の科目に力点が置かれるようになってきているのは、共通の傾向である。以上のことから、①「知識」だけでなく「援助者としての姿勢」や「利用者や連携する多職種との関係形成の能力」を身につけた専門職の姿を学生はイメージして学習している可能性が示唆された。

2) 学生が考える効果的な学習方法

学生が考える通信教育における効果的な学習方法について (N=7) の分析からは、【Skype の活用】での教員や学生との対面でのやり取り、授業中の【掲示板でのディスカッション】スクーリングなどオンライン、オフライン含めて【他の学習者の意見や考えを知る】機会を得ること、学習形態として【同期・非同期に関する発言】などのカテゴリー分類が抽出された。

表 3 学生が考える効果的な学習方法

カテゴリー分類	生のデータの例
【Skype の活用】	<ul style="list-style-type: none"> ・「(映像がある) Skype のほうが多分、リアルに話せて、親近感が持てるのでは」 ・「Skype は生の声だから、感情とかそういうのが生に伝わってくるので、」
【掲示板でのディスカッション】	<ul style="list-style-type: none"> ・「実際的ないろんな方の幅広い意見が聞けたので、私はすごい勉強になったと思う」 ・「(掲示板で) ディスカッションして、スクーリングで会って、またディスカッションしてってということが続けていけたら」
【他の学習者の意見や考えを知る】	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分で何となくやっていた部分を、これで良かったのかな、間違ってるのかなと思う部分の仮説みたいな部分をもう少し肉付け、合ってたんだ、違ってたんだっていう、そういう確認作業を(他の学生の意見を聞きながら) やってあげればいい」

<p>【同期・非同期に関する発言】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「別の場所にいながら、向こう側での意見も聞けるっていうのは、学びが深まる」 ・「(同期性を支持する)理由はやっぱり、他の人の意見とかを、それを聞いて勉強になるっていうのは掲示板と一緒に思うんですけど、生の意見っていうのは掲示板だと伝わらない。」 ・「法令や制度の知識を身につめるためには(ライブ配信は)多分あんまり意味ないと思う」 ・「兼ね合いは多分出てくる。時間帯もあるかもしれないけど。時間帯をセレクトとか、夜間、朝とかは出れる人とか。そしたら先生たち、すごい大変ですよ。」 ・「(対面授業でのコミュニケーションが大切だからと言って)、やたら実施されても通えない」
-----------------------	---

今回、聞き取りを行った学生からは、一方向からの知識の伝達というよりも、Skype や掲示板でのディスカッションといった双方向の学習方法を求める声があがっていた。通信教育はどうしても教科書や動画といった教材を使った「孤独な学習＝孤学」となりがちで、それを解消するために、共に学ぶ仲間を求めていることが伺えた。しかし、その一方で、通信教育で学ぶ学生は、社会人、主婦など多様なライフスタイルであることから、同期型講義・授業に対しては、時間的な制約から過度な実施を否定する意見もみられた。これらのことから、効果的な学びの手法については、以下の3点が示唆された。

- a. 掲示板のような他の学習者の意見を知る機会が良い学習機会となっている。
- b. 同期性があり表情や手ぶりなどが伝わる Skype を使った面接やミーティング、事例検討などが求められている
- c. 同期性の高い、ライブでの事例検討会や学生からのプレゼンテーションを含む授業を求める意見もあったが、同期性を求めると時間的な制約から遠隔教育の利点が失われることを危惧する声もあった。

6. 考察

先行研究及び文献調査においては、通信制の大学において、共同体での学びや、双方向での学びに高い学習効果がある事に関心が寄せられていることが把握できた。

先駆的実践を行う教育機関へのフィールドワークにおいては、同期型の授業を実施し、学生が各々プレゼンテーションを行い、それに対して意見や感想などを述べ合う等の工夫が実施されていた。

福祉士資格取得を目指す本学学生に対するインタビュー調査では、他学生との意見の交換の機会や、双方向の学習方法を求めているものの、過度な同期性のある授業の実施への抵抗もみられた。

これらのことから、今後の通信制におけるソーシャルワーク教育の課題として、以下のことがあげられる。第一に、クライアントや問題を洞察力を含むアセスメントする能力や、コミュニケーション能力の獲得を望む学生の学習動機に答える遠隔教育の教授法を検討することである。

次に、個別学習の時間が圧倒的に多くなる遠隔教育を受ける学生に対して、技術習得のための演習的学習の方法を同期、非同期の配分を考えながら実施する必要があり、これらをどのように展開していくかということが課題となる。

そして、「他者の意見を知る」及び「共に学ぶ学生の存在を相互に利用した学習」の必要性は学生自身も感じており、ソーシャルワークの学び手として、学びの共同体（他の学習者との共同学習）の経験をどのように形成するかを検討する必要がある。

本研究は、少数の学生からの聞きとりによる調査となり、試験的な取り組みであった。今後は、対象者を広げ、より詳細な内容の質問等を用意し、今後の通信制によるソーシャルワーク教育に関して、学生からの声を聴きながら、効果的な教授法について、今後も検討していくこととしたい。

*本研究は、2018年度東京通信大学共同研究費助成（共同研究代表者：小倉常明 研究課題番号：TU共同研201802）を受けて、調査・研究に取り組んだものである。

引用・参考文献

- ソーシャルワーク教育団体連絡協議会（2016）「新福祉ビジョン特別委員会」
「ソーシャルワーカー養成教育の改革・改善の課題と論点」
- 中村卓治（2016）「既存ソーシャルワーカーの現状の課題に関する考察-「新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン」に答えうるために」広島文教女子大学紀要 51 13-23
- Eric Bray、青木久美子（2006）「オンライン通信教育学習者の満足度」メディア

- ア教育研究 第16巻 第2号 17-31
- 大野恵理、須曾野仁志 (2017)「カナダ・アメリカのオンラインコースの概念的枠組み 「探求型コミュニティ」:日本の高等教育機関での応用の可能性」三重大学教育学部研究紀要 第68巻 教育科学 237-243
- Garrison,D.R.,Anderson,T.,&Archer,W.(2000).Critical inquiry in a text-based environment:Computer conferencing in higher education.The Internet and Higher Education 2(2/3) 87-105
- 文部科学省 (2018)「遠隔教育の推進に向けた施策方針 遠隔教育の推進に向けた施策方針」文部科学省
- マイケル G. ムーア/グレッグ・カースリー共著 高橋悟編訳 (2004)「遠隔教育 生涯学習社会への挑戦」海文堂
- 鈴木克夫 (1999)「二つの遠隔教育—通信教育から遠隔教育への概念的連続性と不連続性について—」メディア教育研究第3号 1-12
- 滝田辰夫 (2002)「eラーニング 遠隔教育メディアの変遷と今後の課題」メディア・コミュニケーション
- 長谷川忍、但馬陽一、二ツ寺政友、安藤敏也 (2006)「多様なメディアを利用した同期型遠隔講義環境の構築・実践」メディア教育研究 第2巻 第2号 79-91
- 古塚典洋 (2009)「遠隔教育研究における「遠隔教育」論再考-学習者をめぐる関係性に注目して-」東京大学大学院教育学研究科紀要第49巻
- 熊谷慎之輔 (2009)「M.G.ムーアの遠隔教育論—トランザクショナル・ディスタンス論の精緻化にむけて」岡山大学大学院教育学研究科研究集録第140号 133-141
- 加藤浩、Deborah Bushway、John Byrne 他 (2011)「文部科学省先導的の大学改革推進委託事業「ICT活用教育の推進に関する調査研究」委託業務成果報告書」放送大学学園
- 独立行政法人情報処理推進機構 IT人材育成本部 イノベーション人材センター (2013)「実践的講座構築ガイド ~産学連携教育の自立的展開を進めるために~」独立行政法人情報処理推進機構
- 岡部昌樹 (2009)「金沢星稜大学遠隔授業システムの有効活用による実践的な研究—教授・学習行動の改善による」金沢星稜大学人間科学研究第3巻第1号
- 開原成、篠原信夫 (2012)「遠隔授業システムとインターネットによるeラーニングとの融合-理想の社会人教育システムをめざして-」国際医療福祉大学学会誌 17巻 2号
- 山本恒夫 (2009)「生涯学習支援のための大学 eラーニング」メディア教育研究 第6巻 第1号

- 秋光淳生（2010）「放送大学における遠隔研究指導」メディア教育研究第7巻第1号
- 安間文彦（2017）「クラウド型オーサリングツールを活用した非同期型の演習授業実践」eラーニング研究第6号45-49
- 小池源吾、藤井伊津子（2017）「大学通信教育の教育効果を高めるためのストラテジー」吉備国際大学研究紀要（人文・社会科学系）増刊号31-40
- 片岡昇、久保田賢一（2001）「高等教育における遠隔教育の概要とその実践－歴史的視点と事例研究を題材として－」『関西大学総合情報学部紀要情報研究第15号』
- ソーシャルワーク教育団体連絡協議会（2016）「新福祉ビジョン特別委員会」
「ソーシャルワーカー養成教育の改革・改善の課題と論点」最終報告 ソーシャルワーク教育団体
- 家富誠敏、根津敦、服部万里子（2005）「Eラーニングによる社会福祉教育の実践」城西国際大学紀要13（3）65-80
- 江間由紀夫（2018）「社会福祉士・精神保健福祉士養成カリキュラムにおけるアクティブ・ラーニングの試み」『東京成徳大学研究紀要－人文学部 応用心理学部-第25号』73-81

今橋 みづほ（いまはし みづほ）	東京通信大学 人間福祉学部 助教
井上 健朗（いのうえ けんろう）	東京通信大学 人間福祉学部 講師
小倉 常明（おぐら つねあき）	東京通信大学 人間福祉学部 准教授
矢野 明宏（やの あきひろ）	東京通信大学 人間福祉学部 准教授

